

# 「革命キューバに生まれた私」 チェ・ゲバラの娘、アレイダさんと懇談会

キューバ革命の伝説的な英雄チェ・ゲバラの娘、アレイダ・ゲバラさんによる講演・懇談会が10月21日、中央大学駿河台記念館で行なわれた。この講演・

懇談会は、国際的農漁業界とりわけ精糖業でキューバ共和国のフィデル・カストロ元国家評議会議長と太いパイプをもつ久野修慈理事長・学員会会長の力添えで、またキューバ革命でのカストロ氏の盟友ホセ・フェルナンデス・コシーオ在日本キューバ大使のご理解をいただき、来日中のアレイダさんをお願いし、実現できたものである。

当日は、アレイダさんに「革命キューバに生まれた私」と題して講演いただき、多くの学員の出席をみるこ

## アレイダ・ゲバラさん

小児科医師。1960年革命家チェ・ゲバラとその妻アレイダ・マルチとの間に誕生。7歳で父チェを亡くしその後、父と同じ医師を志し医師となる。現在、医師として活躍するがかわら、キューバ親善大使を務め各国で講演。2008年初来日。著書『ラテンアメリカは世界を変えろ！』他

キューバ共和国は、フィデル・カストロ率いる革命

軍が武装解放闘争で、バティスタ政権を打倒して1959年に革命政権を樹立し、その後1961年に社会主義宣言した社会主義国。そのキューバ革命でカストロと並ぶ中心人物だったのがアレイダさんの父チェ・ゲバラだ。

アレイダさんは、現在、世界各国で精力的に講演活動を行っているが、その動機について、「チェ・ゲバラの娘であるからではない」と説明。本当の理由は、「キューバの娘であり、キューバ国民に育てられたからです」と語った。

父と同じ医師になったことについては、「人類に借りがあるから」で、キューバが多くの国の援助を受けてきたことや自身が沢山の

愛情を受け、恵まれてきたことに対し、医療という形で恩返ししようと考えたからだという。いま、アレイダさんはキューバ国外での医療支援にも積極的に参加している。

「キューバは自由を愛す

る国であり、教養を深めていく国です」とアレイダさん。キューバでは、医療費や教育費が無償で、国民は誰もが健康的な生活を営むことができるし、教育は誰に対しても開かれていることを強調した。



学生記者も参加した懇談会



講演するアレイダ・ゲバラさん（左）

キューバ人の国民性について、「余っているからあげるのはなく、困っている人がいたらあげるという連帯意識を強く持っています。そして、自分たちの問題は自分たちで解決すべきだと考えています」と語り、キューバ人が「尊厳を持つて生きる、自由を愛する、教養を高めること」を信念にしていることを挙げた。

講演会の後半は質疑応答に移った。最初の質問は、アレイダさんが父チェ・ゲバラから最も影響を受けたことは何ですか。 「沢山あり過ぎて語りつくせません。あえて挙げると、父は『人間が革命を行なうのだ。そのために人間は日々精神を養い、革命を日々よいものにしていく必要がある』と言っていました。革命は一度行なったら終わりなのではなく、毎日良いものにしていくことが重要なのです」

「父は愛が深い人でした。革命家にとって一番大切なことは愛することだと思えます」と父チェ・ゲバラを思い起こしながら語った。次に、沖繩の米軍基地問題に関する質問には、「以前、広島に行きました。その時に広島への原爆投下は仕方がなかったという日本人が言ったことに怒りを覚えました。罪のない一般市民を虐殺することはやってはいけないことです。だから広島、長崎の原爆投下は正当化できません。沖繩に行ったときも同じことを感じました」

さらにアレイダさんは、国民は決して負けることがない」という言葉がありま

す。キューバはアメリカに對して屈服したことは一度もありません。キューバの強さは団結なのです」と熱く語った。

アレイダさんは、その他の質問にも丁寧に答え、若い世代への教育に関して、「人間への愛。異文化の尊重、団結、尊敬を教えるいかなければならない」と指摘。日本とキューバの交流については、「国民の文化、歴史のルーツについて知ることから交流したい。お互い言語は違うが音楽は共通。お互いにもっと知り、理解

と語り、講演・懇談会を終えた。

アレイダさんは、優しい大らかな人であり、情熱家であった。アレイダさんが話をはじめるとすぐに引き込まれた。スペイン語で話しているため、直接意味を理解することは出来ないが、話す言葉ひとつひとつに気持ちが届められており熱い想いが伝わってきた。

革命家チェ・ゲバラは、熱い想いで世界を変えようとした。アレイダさんもまた父親と同じ想いを受け継いでいるようにみえた。

（学生記者 上田雄太 11年 文学研究科修士1年）

## 笑顔と怒り顔を見分ける 生後6〜7ヶ月の赤ちゃん 山口真美・文学部教授らが共同研究で解明

生後6〜7ヶ月の赤ちゃんは、大人の「笑顔」と「怒り顔」を見ているときの脳

の反応が大きく異なっている。山口真美・文学部教授の研究チームと自然科学

研究機構・生理学研究所が共同研究で突き止めたもので、山口教授らが11月5日、



右から山口教授、柿木教授、仲渡研究員

後楽園キャンパスで記者会見を開き、明らかにした。

山口教授と生理研の柿木隆介教授、仲渡江美研究員らは、生後6〜7ヶ月の赤ちゃん12人を対象に、実験を行った。近赤外分光法（NIRS）という装置を用いて、赤ちゃんの頭部に外部から近赤外光を照射し

て、脳の皮質表面部分を流れる血液中のヘモグロビンの相対的变化を調べた。

赤ちゃんに、野菜↓笑顔↓野菜↓怒り顔の順に、写真を5〜10秒間隔で反復して見せたところ、笑顔、怒

り顔とともに、写真の顔を見ているときに血流量（脳反応）が大きく増加した。ただ、笑顔と怒り顔では、写真が消えたあとの血流量の変化が異なり、笑顔では血流量の増加状態が続いたの

に對し、怒り顔では急速に血流量が低下して、もとに戻った。

また、笑顔を見せたときは左側頭部が、怒り顔を見せたときは、右側頭部が、それぞれより強く働いていることがわかった。左側頭部は言語能力などに関連、他方、右側頭部は周囲への

注意と関連する活動を担っていることから、生後6カ月以降の赤ちゃんは、ポジティブ表情（笑顔）とネガティブ表情（怒り顔）で処理過程が異なることが明らかにになった。

研究チームでは、「赤ちゃんは、それぞれの表情から読み取れる生物学的な意味

を解釈し、情報に応じて脳内で別々に処理している可能性が判明した」としている。

赤ちゃんの脳内で、人の表情の違いに反応する神経基盤が明らかになったのは、世界で初めてで、山口教授らは、研究成果をアメリカの科学専門誌

『NeuroImage』に掲載する。山口教授らの研究チームは、これまでに近赤外分光法を用いて、赤ちゃんが生後5〜8ヶ月で人の顔を認識できることを証明。今回はさらに進んで人の表情の認識についての研究成果をまとめた。

（編集室）

## 国家公務員等採用I種試験合格者祝賀・激励会 13人が合格、5人が中央省庁に内定得る

2010年度国家公務員等I種合格者祝賀・激励会が11月28日、中央大学駿河台記念館で行われた。今年度の合格者は13人で、この

うち祝賀・激励会には7人の合格者が出席、激励に駆けつけた来賓や本学出身の現職国家公務員、大学関係者らに祝福を受け、今後の活躍を誓った。

祝賀・激励会では、まず永井和之総長・学長が挨拶

に立ち、「国を背負って立つ気構えを理想高く持つて、国事にあたって欲しい」などと述べ、内定者を励ました。続いて本学OBで環境

省東北地方環境事務所の小林香所長が、「日本の将来を考えたとき、必要な政策は何なのかを考えて仕事にあたって欲しい」と祝辞を述べた。

また祝辞に立った久野修慈理事長は、「この国のた

めに活躍するんだという心構えで行政に携わって欲しい」と激励した。

このあと合格者が一人ずつ自己紹介し、関係者に感謝の言葉を述べるとともに、それぞれの進路で全力上げて仕事に取り組むことを誓った。

畠中誠二郎・総合政策学部教授の乾杯の音頭で歓談に移り、学生記者はこの日出席した合格者7人に、そ

れぞれ話を聞いた。

◆食品廃棄の現場みて「食」について考える◆

農林水産省から内定を得たのは、井坂あゆみさん(法学部)。「スーパーでのアル



バイトで、食品廃棄の現場が身近にありました。食べ物が、捨てられる現場を見て、農村地域で育った経験と併せて食について考え始めたんです」というのが農水省入りの動機。「日本の食を変える環境で働き、高齢化している農村を活性化させ、伝統農業を守ってきたい」という。

2年生の夏に、国家公務

員を視野に入れ始め、3年生から予備校で本格的に試験勉強を始めた。炎の塔でも勉強し、そこで仲間と話すことが勉強の支えになった。先輩達には、「やりた

いことを明確にしながら、問題意識を持って多くの経験を積んで欲しいですね」とメッセージをくれた。



1年生の春休みにインドネシアのNGOでボランティアをしたことや、介護施設訪問の経験などを通して、「本当の豊かさとは、何だろう」と考えるようになった。3年生の春から予備校に通い始め、科目の多い試験を効率的に勉強することに全力をつくした。

「生活の豊かさを、働いている人たちが感じていけるような環境づくりができたらしい」と語り、厚労省の仕事に想いを馳せた。

「異なる部署や分野を経て成長していけたらいいですね」。こう語るのは、京都府庁に内定が決まった本永喜彦さん(法学部)。進路に関しては多様な選択肢があるなかで京都府庁に入庁を決めた理由としては、「現場を見たうえで何が足りないかを探ることのできる環境に魅力を感じたから」という。いまは、「何



にも興味を持ち、政策で府民に働きかける役割を担いたい」と考えている。

2年生の4月から始めた試験勉強では、予備校に通った。「やりたいことが多い場合、予備校では効率的に勉強ができる」というのが理由だ。国家公務員試験では、「直前の重圧に対してはセルフコントロール力が要求される」と経験談を語ってくれた。

◆マクロな政策に興味 法律知識活かし公取委へ◆

公正取引委員会から内定を得た飯田達也さん(法学



部)は、藤本哲也法学部教授の犯罪学の講義で、「マクロな政策に興味を持った」ことが、国家公務員を目指すきっかけになった。ロースクールにも進学したが、「法曹を目指すというのは建前」で、実際は興味あるものを専門的に学ぶためだった。

市場の番人ともいわれる公正取引委員会。「ナイスジャッジがナイスプレーを光らせる」という信念のもとに、法律知識をいかし、「良質廉価な商品を生み出す企業が、非合理的な妨害を受けない市場を確保して

いきたい」と意気込みを語ってくれた。

**足立明子さん(法学部)**は、



国家公務員試験に合格したが、今回は官公庁に就職の道を選ばなかった。官庁訪問で「勉強不足」を実感し、「もっとしっかり勉強しなおしたい」と大学院で勉強を続けることにした。

国際インターンシップで出会った外交官の影響を受け、国家公務員を目指した。2年生からは外交研究会で勉強を始め、予備校にも通った。試験内容の異なる大学院入試試験と国家公務員1種試験を両立させるこ

ツは、「切り替え」で、時間をしっかりと区切って両方の試験に取り組んだ。

後輩に対しては「色々やってきて後悔したことはない。挑戦してベストを尽くして欲しい」と語った。

**風間匡美さん(法学部)**

なしてきた。

金融庁では、銀行の監督はもちろん国際交渉に関わっていきたく、と意欲的

だ。後輩へは、大学に入つて、良かったと思えることをして欲しい」とメッセージをくれた。

◆25カ国放浪して外交官に「日本とアジア」に関心◆

「国家公務員の中でも、

具体的に外交官になりたかった」ときっぱり言うのは、外務省から内定を得た森谷泰韻さん(法学部)。



海外の旅が好きで、訪れた国は25カ国ほど。この外国

放浪を通して、「日本とアジアの関係をよくしたい」との思いを抱くようになった。

中央大学で行われる外交講座にも参加し、知識を深め、大学3年生から本格的に外交官を目指し始め、予備校に通った。年が明けてからは毎日7、8時間、試験直前は10時間の勉強をこなした。

「バイトもサークル活動もしつかりやりました。英語はそんなに得意でもない

です。普通の学生です」という森谷さんは、「環境や能力にとらわれず、五感を開いて自分のやりたいことを探してください」と後輩にアドバイスした。

祝賀・激励会は、合格者を代表して森谷さんが謝辞を述べたあと、最後に橋本基弘法学部長が、閉会の辞を述べて、閉会した。

(学生記者 加藤静香 法学部1年/渡辺沙希 法学部1年)

